



## 「泥臭いまでのコミュニケーションへ」

近年、アートの文脈において本格的な人間間のコミュニケーションが語られなくなったように思える。発端は、ひきこもりの象徴でもある「マイクロポップ」が市民権を得たからであろう。他者と隔絶されて生きていてもその存在は認められる。ネット、携帯、子供に一人部屋をあてがわれる、そんな人と人とを分断した文化が蔓延する、そんな世の中になっている。コミュニケーションの欠如。いや、あえて人間が選択したのだから「コミュニケーションの退化」と言ったほうがいいかもしれない。人類の進化の中で尾が退化していったように、人間は合理性の名の下に必要性が低くなったものをどんどんと排除していく。

服部正志は自らの作品の中で「コミュニケーション」の必要性を、時代遅れと言われても訴え続ける。泥臭く、くどいまでに。彼のほとんどの作品に含まれているヒト型のアイコンは、いわば筆で大きな「人」の字を書くくらい、誰もがわかるテーマ提示である。そんな彼の「ヒト」のかたちに入められているのは、普遍性と違和感に代表される当展のメインテーマである「ヒトの二面性」を象徴としたものだ。普遍的なかたちが同じく普遍的な空間と接触することによって生じる違和感。更には造形物の表面を包む素材が提示する違和感と、その違和感を容認し受容することで成立する普遍性。裏返しを見てまたそれを裏返すことで認識するという「二面性」が、「ヒト」の思考プログラムの中に自然と組み込まれている現実を、彼の作品からまざまざと思ひ知らされる。

今回、服部はワークショップを自らの発表の中に織り込む、初めての試みをおこなった。作家である一方で教育者の一面も持つ彼にとって、ここでは彼自身の「二面性」が問われる場となった。教育者として教壇に立つのが常の中で、作家の立場で子供たちに何らかの指針を与え、更に子供たちの手で作られたものを自らの作品に置き換えて仕上げるという、彼の「二面性」に矛盾を生じかねない出来事であった。しかし、ワークショップが終わったその日の晩、私からの労いの返事として彼はこう答えた。「私は自分の生き様を伝えることが全てですから。」アナログなコミュニケーションを頑なに遵守して子供たちに接し続けた行為とプロセスそのものが、「二面性」に潜在する矛盾を打破するのだと訴えているかのようであった。

服部がコミュニケーションを主張する当展の空間には、アイコンとしてのヒト型をした作品群が立ち並び、単純明快なマルなどの記号的なかたちも、ワークショップで子供たちが描いた外壁のマルを基点に広がっていく。こうしたシンプルな要素が細胞分裂のようにトリッキーな動きの中で増殖していくさまに、恐らく多くの鑑賞者が居心地の悪さを感じてくれるであろう。しかし、そこで感じる「違和感」とは、決して自らの感覚に違い異なるものではない。その存在を自らの中で消化し、承認まで至る過程を経ることによって、「二面性」という価値観の正当性が、自らのアイデンティティの中に認められるであろう。

彼のスタイルの形容に頻繁に使う「泥臭さ」という言葉は、「二面性」を通じてコミュニケーションの重要性を説くために必要なプロセスそのものである。痕跡の集積として制作される全ての作品とワークショップの成果の双方に込められた「泥臭いまでのコミュニケーション」こそが、今服部がくどいと言われても訴え続けていくものであり、美術界においてももう一度復興しなければならないコンセプトの一つなのである。